

「ムサシィ……あんたどこほつつき歩いてんのよ〜」許してたもれ……」  
「それ！ あんた姫路の橋の欄干にそれ刀で彫り付けたでしょう〜あのあと弁償で大変だったんだから〜」それはすまぬことをした……」  
「で、どうすんの？ あ？」  
「どう……って……」  
「あたし賛言してないよ。あんたらちゃんと定職就いてさ、賃貸でいいからマンション借りて、クルマだつて国産の小さいのでいいじゃん。で、年に1回くらいはどっか旅行いってさ。一緒にだよ！ あんた一人じゃないよ」  
「お通、俺は剣の道に生きて……」  
「なりに言つてんのよ。剣じゃなくてペンでしょ〜！ あたし知つてんだからね。新聞社に派遣かバイトか、もぐりこんだんでしょう。そりゃあんたは旅行好きだから出張とかあつてうれいかも知んないけど、追っかけてるあたしの身にもなつてよね〜」  
「ハ〜イ、キャシー！」  
「キャシーって誰よ！」  
「まあまあ、それくらいにしてやんな。ムサシは絶対に修行しなくちゃなんないんだ！」  
「なんでよ！」  
「いいのかい？ この世からある日本語が消えらまっても？」  
「なにそれ？」  
「ムサシ・修行、ムサシ行、ムシヤシユギョウって言葉がさ！」  
（笑い声）  
「誰？ さっきから笑つてるの誰！ あたしのことがそんなにおかしいの！」  
お通はこの笑い声により、徐々にこころを病んでゆくのであった。